

# 方程式



作・JUMP NOZAKI

## 方程式

---

「方程式って、わからないものをx（エックス）って置き換えると解けるんだって。意味分かる？」

月曜日の夕食時、いつもこの時間は私が夕食の準備をしている後ろで、娘は台所のテーブルを使って宿題。これは、小学校以来、中学生になっても続く我が家の習慣。母子二人のアパート暮らしでは、椅子に座って勉強できる環境はここしかない。

「今日さあ、先生が言ってたんだけど、サンタや幽霊やUFOを先生見たことないんだって。私だってそうだけど……」

そうか、もうそろそろ年末なのだ。今年は何をクリスマスプレゼントにしよう。

「見たことのないものを、いるって考えるのは、それが心の中にいるってことなんだって」

あなたの担任の先生けっこうロマンチックなこと言うわね。

「目に見えないものでも大切なものがあるように、私たちが、テレビを見たり、音楽を聴いたり、マンガを読んだりするのは、生活に直接役立たないけれど、もっと深いところで大切な経験なんじゃないかって」

なかなかリ・カ・イある先生じゃない。それで先生は何が言いたいの。「私たちがさあ、数学って、電卓があれば計算できるし、円の面積なんて一生求めることなんかないって言ったわけ。そしたら、生活に役立たないことの方がむしろ余計に人間として大切なんじゃないかって」

そうきたか。

「わたしたち、ぽかんとしたら、こんないっぱい宿題出すんだよ」

娘は、問題集をこちらに広げて見せた。

いつもと変わらぬ娘の笑顔がそこにある。

私はそのとき、まったく別のことを考えていた。それは、私たちにとって大切なこと。

娘は、中学校に入学してすぐ、学校に行かなくなった。そのときの私は、娘に片親の負い目を感じさせないために、別れた男より幸せになろうと、がむしゃらに働いていた。「大切なのはお金」が私が信じて疑わなかった答えだった。

けれど、娘は私の間違った答えに、傷つき、一人で震えていたのだ。私は答えを間違っていたことによりやく気づいた。「大切なのは娘」であったのだ。娘と過ごす時間、話をするひとときこそ大切なものだった。

ボロボロになった目に見えない「親子の絆」を少しずつ紡ぎ直し始めた頃、娘は再び学校に通うようになった。偶然にも担任の先生は、私の幼なじみであり、親身になって相談にのってくれた。

娘の言葉を上の空に聞きながらも、目に見えないものの方が大切なのだと私は確信していた。

「わからないものをx（エックス）って置き換えるってのはさあ、わからないことをわからない！って開き直ってるみたい。そうすると解けちゃうんだから、方程式って不思議だよお」

私の幸せも、思い切って「わからない！」って開き直ってみようか。そうすると案外、私の幸せの方程式も簡単に解けるかもしれない。その答えのx（エックス）は、あのとき「大切なのは娘」と教えてくれたあの人のかもしれない。

そういえば、見えないものの方が大切だという話を昨日あの人にしたことを思い出した。